

カポーティ小説の詩的特質(4) - 比喻標識“as if (/as though)をめぐって-

著者	大園 弘
雑誌名	教養研究
巻	22
号	3
ページ	25-53
発行年	2016-02-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000576/

カポーティ小説の詩的特質 (4)

比喩標識“ as if (/ as though) ”をめぐって

大 園 弘

はじめに

筆者はこれまでにカポーティ(Truman Capote 1924-84)の処女中編小説 *Other Voices, Other Rooms*(1948以下、*Other Voices* と略す)を中心に、韻律、比喩標識“(-)like”を用いた直喩、強意的直喩“(as)~ as”の観点から、カポーティ小説の詩的特質の分析を試みてきた。⁽¹⁾本稿でも引き続き *Other Voices* をテキストとして、あらたに比喩標識“ as if (/ as though)”を用いた比喩表現の詩的特質に注目する。

比喩標識“(-)like”や“(as)~ as”と“ as if / as though)”との表現形式上の違いは、後者が、ほとんどの場合、動詞の要素を含む節や句を伴うという点である。“ as if / as though)”という比喩標識を仮定法との関連で捉える傾向が強い日本人にとっては、事例(a)のように、“ as if (/ as though)”に節(Subject+Verb)が続くのは当然のことに思えるであろう。⁽²⁾また、実際には、“ as if / as though)”に不定詞(事例(b))や分詞(事例(c), 事例(d))が続いたり、稀にはあれ、動詞の要素を含まない前置詞句(事例(e))や形容詞(事例(f))や副詞(事例(g))が続くこともあるが、後述のとおり、そのような場合ですら、動詞が不在であるわけではない。

(a) “Joel. Jo-el Har-ri-son Knox.” He separated the syllables explicitly, *as though*

he thought the driver deaf, but his voice was uncommonly soft.⁽³⁾

- (b) She [Amy] perked her head suddenly, *as if to hear some distant sound*; her eyes squinted, then closed altogether. (p.47.)
- (c) Romeo stood hesitantly waiting, *as if expecting Joel to take the lead*; ... (p.29.)
- (d) But Radclif merely smiled a curious smile, *as if amused by a private joke too secret for sharing*. (p.15.)
- (e) ..., his [Pepe's] flat animal-shrewd eyes, bright *as though with tears*, regarded Dolores exclusively; ... (p.147.)
- (f) ...; then, *as if insane with terror*, he [John Brown: the mule] came to a gallop, and lunged, splintering the balcony's rail. (p.225.)
- (g) He'd [Joel had] seen the patch, known it for an obstacle, and yet, *as though deliberately*, he'd thrown himself upon it. (p.72.)

“as if(/ as though)”のあとに動詞の要素を含む句や節が続くということは、比喩標識“(-)like”や“(as)~as”の場合に比して、より詳細な描写が可能となることを意味する。動詞はその種類に応じて、目的語や補語を必要とするし、必要に応じて動詞の種類とは無関係に副詞句などの修飾語句を導くことができるからである。また、より詳細な描写が可能になるぶん、比喩表現の解釈の幅が狭められることにもつながる。なぜならば、比喩表現をとおして読者に委ねられるさまざまな解釈の可能性と多様性が、作者の詳細な「説明」によって制限を受けるからである。

したがって、詩的效果という観点からすれば、“as if(/ as though)”を用いた比喩表現の詩的效果は、他の比喩標識を用いた比喩表現ほどには高くないとの推測が成り立つ。だが、実際には、この予測に反して、*Other Voices* に確認できる116事例のなかには、本稿第Ⅲ節でみるように、カポーティ独自の詩的感性を反映した事例が少なからず存在し、それらの事例が *Other Voices* の詩的效果を高める要因にもなっているようである。

よって本稿では、*Other Voices* のなかの116事例の “as if / as though)” 表現に絞りを、その詩的効果の考察を行ないたい。まず第Ⅰ節では、“as if / as though)” を用いた全116事例について表現形式上の分類を試みる。第Ⅱ節では、*Other Voices* における “as if / as though)” 表現を被喩辞（喩えられる事項）の種類に基づいて2つの類型に分類する。第Ⅲ節では、第Ⅱ節の分類に基づいて、作者独自の感性の反映と見なしうる事例に注目しつつ、散文 *Other Voices* における詩的効果の検証を行なう。

第Ⅰ節 表現形式上の分類

前述のとおり、*Other Voices* には “as if / as though)” を用いた比喩表現が116事例確認できる。*Other Voices* の Random House 版初版は231ページで組まれているので、2ページに1回の頻度で “as if / as though)” 表現が登場する計算となる。このうち、“as if” は68事例、“as though” は48事例である。さらにこれら116事例を表現形式別に分類すると、事例数の多い順に、以下の6とおりとなる。もちろん、表現形式上の違いが “as if / as though)” を用いた比喩表現の詩的効果を左右する要因になるとは考えがたいが、本節では、次節での考察に先立ち、以下の6形式について若干の考察を試みる。

- | | |
|---|-----|
| (1) as if(/ as though)+S(Subject)+V(Verb) | 83例 |
| (2) as if + 分詞 | 19例 |
| (3) as if + 不定詞(to ~) | 9例 |
| (4) as if(/ as though)+ 前置詞 | 3例 |
| (5) as if + 形容詞 | 1例 |
| (6) as though + 副詞 | 1例 |

まず、(1)に注目したい。“as if(/ as though)” は句接続詞(Phrasal Conjunction)

である。接続詞の種類としては従位接続詞 (Subordinating Conjunction) なので、“as if(/ as though)” のあとには節 (S - V) が続くのが一般的である。(1)の83事例はこれに該当する。116事例全体に占める割合は、およそ72%である。

(1)の形式は、さらに2とおりの表現形式に細分化が可能である。前掲の事例(a)のように“as if(/ as though)” に先行する節の内容を受けて、「まるで～であるかのように」と観察者の印象 (作者の感性) を述べる形式 (39事例) がその1つである。⁽⁴⁾

(a) “Joel. Jo-el Har-ri-son Knox.” He separated the syllables explicitly, *as though he thought the driver deaf*, but his voice was uncommonly soft.

つぎに、“as if(/ as though)” に先行する節 (clause) や文 (sentence) の内容を漠然と代名詞 “it(/ It)” で受けて、“as if(/ as though)” 以下を補語とする形式 (31事例) である。事例 (h) ・(i) がその好例である。⁽⁵⁾

(h) When twilight shadows the sky it is *as if a soft bell were tolling dismissal*, for a gloomy hush stills all, and the busy voices fall silent like birds at sunset. The families in their vehicles roll out of town like a sad, funeral caravan, and the only trace they leave is the fierce quiet that follows. (p.19.) . . . 先行する節 (主節) の内容を漠然と代名詞 “it” で受ける

(i) It was *as if he lived those months wearing a pair of spectacles with green, cracked lenses, and had wax-plugging in his ears*, for everything seemed to be something it wasn't, and the days melted in a constant dream. (pp.10-11.) . . . 先行する文の内容を漠然と代名詞 “It” で受ける

そして最後に、“feel”、“look”、“seem”、“sound”などの感覚と関わる動詞

に導かれる形式(13事例)である。「まるで～であるかのよう」 という意味を伝える “as if(/ as though)” 自体が、観察者の印象(作者の感性)を伝えるものであることは上述のとおりであるが、そのような印象が、感覚を表す動詞 “feel”(触覚または心的察知)、“look”(視覚)、“seem”(思考による判断)、“sound”(聴覚)を媒体として表現されているのが、前形式と異なるこの形式の特徴である。たとえば、下掲の事例(j)は、両腕を腰のあたりに当て、両脚がくしゃくしゃに折れ曲がり、唇をぼかんと開けた状態で眠りに落ちているジーザス・フィーバーの様子(見た目)を、一撃で殴り倒されたボクサーの様子になぞらえた表現である。

(j) Arms akimbo, legs crumpled, lips vaguely parted - he [Jesus Fever] **looked as if sleep had struck him with a blow.** (p.39.)

続いて、(2)・(3)・(4)・(5)・(6)に目を転じよう。これらの表現形式は、いずれも S-V の要素が不在のではなく、先行の、または、後続の主節の S-V が “as if(/ as though)” に導かれる従属節の S-V と同じであるために、以下のとおり、“as if(/ as though)” に続く S-V(下線部)が省略されていると考えることができる。

(2) as if + 分詞

(c) Romeo stood hesitantly waiting, **as if expecting Joel to take the lead**; ...

(c') Romeo stood hesitantly waiting, **as if he were** expecting Joel to take the lead; ...

(d) But Radclif merely smiled a curious smile, **as if amused by a private joke too secret for sharing.**

(d') But Radclif merely smiled a curious smile, **as if he were** amused by a private

joke too secret for sharing.

(3) as if + 不定詞 (to ~)

(b) She [Amy] perked her head suddenly, *as if to hear some distant sound*; her eyes squinted, then closed altogether.

(b') She [Amy] perked her head suddenly, *as if she were to hear some distant sound*; her eyes squinted, then closed altogether.

(4) as if (/ as though) + 前置詞

(e) ..., his [Pepe's] flat animal-shrewd eyes, bright *as though with tears*, regarded Dolores exclusively; ...

(e') ..., his [Pepe's] flat animal-shrewd eyes, bright *as though they were* with tears, regarded Dolores exclusively; ...

(5) as if + 形容詞

(f) ..., then, *as if insane with terror*, he [John Brown: the mule] came to a gallop, and lunged, splintering the balcony's rail.

(f') ..., then, *as if he were insane with terror*, he [John Brown: the mule] came to a gallop, and lunged, splintering the balcony's rail.

(6) as though + 副詞

(g) He'd [Joel had] seen the patch, known it for an obstacle, and yet, *as though deliberately*, he'd thrown himself upon it.

(g')He'd [Joel had] seen the patch, known it for an obstacle, and yet, *as though he had done deliberately*, he'd thrown himself upon it.

以上のように、*Other Voices* には “as if(/ as though)” を用いた多様な表現形式が確認できる。

第Ⅱ節 *Other Voices* における“as if(/ as though)”表現の2類型

Other Voices は、三人称の語り手が主人公の少年ジョエルによる父親探しの旅を、全知の視点から語り紡いでいく物語である。三人称の語り手 = 全知の語り手は、言うまでもなく作者カポーティ自身である。

ところで、「まるで～のように」という比喩表現によってなぞらえられる対象(被喩辞)は如何なる事項であろうか。*Other Voices* のなかの116事例を鳥瞰する限りでは、概ね、2とおりの分類が可能である。登場人物の言動や所作がなぞらえの対象である場合と、情景を中心とする、前者以外の事項がなぞらえの対象となる場合の2とおりである。まずは、登場人物の言動や所作がなぞらえの対象となっている “as if(/ as though)” 表現の特徴を考察したい。

人の言動や所作には、当然のことながら、それらを引き起こす心理的背景が存在する。暴力的な言動の背景に苛立ちや怒りが、肩をすくめる仕草の背景にどうしようもないという気持ちが見え隠れするようにである。作者により架空に造形された人物ではあれ、*Other Voices* の登場人物たちの言動や所作の背後にも、何らかの心理が働いているはずである。その心理の在りようを、作者の思惑どおりに読者に伝える役割を担っているのが、比喩標識 “as if(/ as though)” による比喩表現である。たとえば、前掲の事例(a)において、作者は、自分の氏名を音節ごとに区切りながらゆっくりと明瞭に発音するというジョエルの動作(被喩辞)を描写している。作者はさらにこの動作を “as though” 以下で聴覚障害者に語りかけている人物の動作(喩辞)になぞらえている。その結果、自分

の名前を聞き手ラドクリフにゆっくりと正確に伝えることで、ラドクリフから何らかの有用な情報が得られるのではないかというジョエルの期待感と、単身で目的地向かう途中の彼の不安で切実な思いが読者に自ずと伝わるのである。同様のことは、次の事例(k)と(1)でも言えよう。

(k) The boy stared at the floor embarrassedly. “Well,” he said, and shot Radclif a swift, accusing look, *as if the driver was robbing him of something*, “they were divorced, and mother was always called me Joel Knox.” (p.8.)

少年は狼狽したように床を見つめた。「そのー」少年はそう言うと、その運転手が彼から何かを盗もうとしているかのように、ラドクリフに鋭い非難の視線を向けた。「両親は離婚したんです。母さんはぼくのことを、いつもジョエル・ノックスと呼んだんです。(傍点筆者)

(1) But Radclif merely smiled a curious smile, *as if amused by a private joke too secret for sharing*. (p.15.)

しかし、ラドクリフは、他人と分かち合うのがはばかれるような秘かなジョークをおもしろがっているかのように、奇妙な笑みを浮かべた。(傍点筆者)

触れられたくない事柄を他人から詮索された場合、人は何かを奪われかけているかのように感じて、鋭い非難の視線を相手に向けることがある(事例(k))。鋭い批判の視線の背後には、触れられたくない事情を赤の他人から詮索されているという当惑と腹立たしさの心理が容易に見てとれる。また、相手との会話のなかで、ふと、ある空想が浮かんで、傍目からは奇妙に映る笑みを浮かべることもあるであろう(事例(1))。

以上のように、登場人物の心理の在りようを読者に伝える役割を担っているのが、登場人物の言動や所作がなぞらえの対象(被喩辞)となっている“as if(/ as though)”表現の特徴である。なお、この部類の喩表現は、そのような役割や目的を遂げることが眼目であるため、詩的效果との関連性は薄いと考えられる。

つぎに、情景を中心とする、前者以外の事項がなぞらえの対象となる場合の“as if(/ as though)”表現の特徴について考察したい。

この部類の喩表現は、前者が登場人物の心理の在りようを前景化するのに対し、作者自身の感性や独創性が前面に打ちだされるという特徴を持つ。また、前者において“as if(/ as though)”表現が有用であるためには、“as if(/ as though)”以下の叙述内容とその趣旨が作者と読者との間で無理なく了解される必要がある一方で、本部類における“as if(/ as though)”以下の叙述は、必ずしも読者の了解を必要としない。“as if(/ as though)”表現の詩的效果との関連からすれば、むしろ、“as if(/ as though)”以下の叙述が読者に意外性をもって受け入れられる場合にこそ、詩的效果が生まれると考えてよいであろう。

では、作者独自の感性(独創性)を反映し、かつ、読者に意外性をもって受け入れられるような新鮮味を備えた“as if(/ as though)”表現とはどのようなものであろうか。前掲の事例(h)と新たな事例(m)を用いて、この点を考えてみたい。

(h) When twilight shadows the sky it is *as if* a soft bell were tolling dismissal, for a gloomy hush stills all, and the busy voices fall silent like birds at sunset. The families in their vehicles roll out of town like a sad, funeral caravan, and the only trace they leave is the fierce quiet that follows. (p.19.)

夕闇が空をぼかしはじめると、まるで柔らかな鐘の音が散会を告げてでもいるかのようだった。というのも、陰鬱な静けさがあたり一面に広がり、にぎやか

な声は夕暮れ時の鳥たちのように静まり返ったからだ。それぞれの家族は、それぞれの車に乗り込んで、悲しい葬列のように、ゆっくりと町から去っていくのだった。そして、彼らがあとに残したのは、そのあとの恐ろしいほどの静寂だけであった。(傍点筆者)

(m) Here and there in the mellow dark fireflies signaled one another *as though messaging in code*. (p.31.)

柔らかな暗闇のそこそこに、まるで暗号電報でも交わしているかのように、蛍が互いに合図しあっていた。(傍点筆者)

これらの事例における被喩辞は、登場人物の言動や所作とは無関係である。「人物」とすら関係していない。事例(h)の被喩辞は「夕暮れ」であり、事例(m)のそれは「蛍(の光の明滅)」である。ともに「情景」が被喩辞である。これらの事例において、作者(語り手)は、もはや、自らが造形した登場人物の心理の代弁者ではなく、自らの感性の表現者として、場面ごとに独特のトーンを醸す主体なのである。「夕暮れ」から「散会を告げる柔らかな鐘の音」を想起し、「蛍(の光の明滅)」から「暗号信号」を連想するのは、作者の豊かで研ぎ澄まされた感性の表れであり、そうした感性こそが、詩的な雰囲気生成に大きく関わっているように思われる。

なお、事例(h)と事例(m)は、上述のとおり、ともに「情景」を被喩辞とする事例であるが、本稿では「情景」を被喩辞としない場合であっても、被喩辞が登場人物の心理を反映するものでない限り、同じ部類に属するものと見なしている。たとえば、つぎの事例(n)がそれに該当する。

(n) Mr Sansom's head lolled back and forth, *as if saying no no no*; actually, and his voice sounded prickly *as though a handful of pins were lodged in his throat*, ...

(p.171.)

サンソム氏の頭は、まるで、いや、いや、いや、とでも言っているかのように、左右に揺れた。そして彼の声は、まるで、喉に一握りの針が刺さってでもいるかのように、とげだらけに聞こえた。(傍点筆者)

本事例の1つ目の被喩辞に該当するのは、サンソム氏の頭の左右の揺れ、である。彼の頭の揺れは、ランドルフの誤射で背中に銃弾を受け、身体を自由を奪われた寝たきりのサンソム氏の枕の位置を息子ジョエルが整えてやる際に生じた揺れである。そして、2つ目の被喩辞に該当するのは、サンソム氏の声、である。いずれも、登場人物に関する被喩辞であるが、サンソム氏の頭の揺れも声も、彼の心理の反映ではなく、“as if(/ as though)”以下の喩辞は、あくまで作者(語り手)自身の感性(独創性)の反映である。

本稿が目指すのは、作者(語り手)自身の感性(独創性)を反映する後者の事例である。

第Ⅲ節 詩的効果に関わる事例の考察

前節では、登場人物の言動や所作が被喩辞であるか、情景等が被喩辞であるか、換言すれば、被喩辞が登場人物の心理と関係があるか否かによって、“as if(/ as though)”表現の詩的効果の有無が生じるとの仮説を示した。詩的効果が期待できるのは後者の部類であるというのが筆者の予測である。*Other Voices*に確認できる116事例のうち、前者の部類に属すると判断できるものは65事例、後者の場合は51事例である。本節では、詩的効果との関わりが深いと期待できる後者の事例のなかから、8事例を取りあげ、個別に詩的効果の考察を試みる。各事例には拙訳を付し、必要最低限の場面紹介を添えている。

事例 (1)

A jungle of stars rained down to cover him [Jesus Fever] in blaze, to blind and close his eyes. Arms akimbo, legs crumpled, lips vaguely parted he looked *as if sleep had struck him with a blow.* (p.39.)

ジャングルのような星屑が雨のように降り注いで、ジーザス・フィーバーを光に包みこみ、彼の目を眩ませ、目を閉じさせた。両手を腰に当て、両脚を曲げ、あぐりと口を開けた彼の姿は、まるで睡魔が一撃のもと、彼を打ち倒したかのように見えた。(傍点筆者)

[考察]

13歳の少年ジョエルは、母の死後しばらくして、ものごころつく前に別れた父と一緒に暮らすために父の住むスカリーズ・ランディングへ向かう旅の途中であった。一人旅であるうえに、父に関する情報はほとんどなく、期待と不安が募るばかりで、「ジョエルはニュー・オーリンズを発ってから、1時間も満足に寝ていなかった。」(p.9.)彼は最初の経由地パラダイス・チャペルに着くのにもまる1日ほぼ不眠の旅を続けていた。パラダイス・チャペルでは、運よく、サム・ラドクリフのトラックに便乗させてもらい、ジョエルは睡魔とたたかいながら、20マイル北のつぎの経由地ヌーン・シティに辿りついた。ヌーン・シティではスカリーズ・ランディングの使用人で、100歳をゆうに超える黒人ジーザス・フィーバーが馬車でジョエルを2日連続で迎えに来ていた。夕闇迫るころ、二人はスカリーズ・ランディングに向けて出発するが、やがて漆黒の闇は星明かりを際立たせ、無数の星屑のきらめきが、瞬間にジーザス・フィーバーを眠りへと誘う。本事例は、その場面からの引用である。

上記のとおり、ジョエルもさることながら、超高齢のジーザス・フィーバーにとって、いつ到着するとも知れぬジョエルを出迎える2日間連続の「待機」は骨身に應える苦役であった。ようやく、ジョエルの出迎えを果たし、馬車の

揺れ、漆黒の間、降り注ぐ星屑が、一瞬のうちにジーザス・フィーバーを眠りへといざなったのである。作者はその様子を、「まるで睡魔が一撃のもと、彼を打ち倒したかのように」と描写しているわけである。

ところで、多くの読者はこの描写からボクシングを想起するであろう。ボクサーが一撃で相手を仕留めるシーンは、ボクシングの醍醐味の一つである。リングに倒れこんだ相手は微動だにしない。ほっとした気持ちと同時に強い眠気に襲われて、一瞬のうちに死んだように眠りに落ちたジーザス・フィーバーの姿は、まさしく、一撃を食らってリングに倒れたボクサーさながらである。

直喩は二項間における類似のイメージの重なり合いによって成立するものであるが、おそらくは手綱を握ったまま両腕を腰に当て、両脚を曲げ、あぐりと口を開けて馬車の馭者台に死んだように座ったままのジーザス・フィーバーの姿と、リングに倒れ、ピクリとも動かないボクサーの姿は、確かに類似のイメージで重なり合う。だが、本事例が単なる直喩を超えて詩的な趣きを漂わせているのは、本事例がボクシングやボクサーから連想する激しい息づかいやパンチの応報などの動的なイメージとは対照的に、静的なイメージと深く関わりあっているからではなからうか。それは暗闇であり、夜の静寂であり、星々のきらめきであり、ジョエルを無事出迎えることのできたジーザス・フィーバーの安堵感である。また、本事例での描写が、星明りに照らされて死んだように眠るジーザス・フィーバーのみならず、間接的にはあれ、スカリーズ・ランディングからの出迎えを受けて不安感から解放され眠りに落ちたジョエルの姿を絵の如くに浮かび上がらせている点も、本事例の詩的な要素であろう。

事例 (2)

He [Joel] swished the lavender curtains apart, and moved into the bleak light filling the barren, polished chamber towards his image floating on the watery-surfaced looking-glass; his formless reflected face was wide-lipped and one-eyed, *as if it were a heat-softened wax effigy*; the lips were a gauzy line, the eyes a glaring bubble. (pp.63-64.)

ジョエルはシュッという音を立ててラベンダー色のカーテンを開け、侘しげな光で満たされた、飾り気のない、磨き上げられた部屋に入り、水面のように波打った姿見に映る自分の鏡像に近づいていった。鏡に映る形の崩れた彼の顔は、まるで熱で溶けた蠟人形であるかのように、口が大きく裂け、一つ眼だった。唇は薄く透きとおった一本の線になり、眼はキラキラ輝くシャボン玉だった。(傍点筆者)

[考察]

日常生活において、自分の姿が何かに映し出されて歪んで見えるという経験は誰にでもあるはずである。夜の電車の窓であれ、町のビルの銀色の壁であれ、本来、鏡として作られてはいないものに映る自分の姿は、むしろ、歪んで見えるのが自然である。だが、歪んで映る自らの鏡像を言葉で描写するとすると、「お化けみたい」というような類の形容が関の山なのではないだろうか。

本事例では、波打った姿見に映る形の崩れたジョエルの顔を、作者は「まるで熱で溶けた蠟人形であるかのように」と形容しているのであるが、「熱で溶けた蠟人形」を見たことのある読者は、一体どれほどいるであろうか。いるとしても、ごく少数であるに違いない。だが、それにもかかわらず、ほぼすべての読者は、「熱で溶けた蠟人形」という喩辞を何の抵抗も感ずることなく、自然に受け入れるのではないだろうか。なぜであろうか。

それは、まさしく、「熱で溶けた蠟人形」が喚起するイメージが、「形の崩れた人間の顔」と絶妙に符合しあうからに他ならない。佐藤信夫は、形容しがたい事物の特徴を独自の比喩表現で言い得た場合、それを「発見的認識の造形」⁽⁶⁾と呼んでいるが、本事例における「熱で溶けた蠟人形」もそれに近い。作家の独創性から生み出され、新鮮味と高いイメージ喚起力を有する表現であるという意味において、本事例を詩的と見なすことに無理はないように思われる。

事例 (3)

High in chinaberry towers the wind moved swift as a river, the frenzied leaves, caught in its current, frothed like surf on the sky's shore. And slowly the land came to seem *as though it were submerged in dark deep water*. The fern undulated like sea-floor plants, the cabin loomed mysterious as a sunken galleon hulk, and Zoo, with her fluid, insinuating grace, could only be, Joel thought, the mermaid bride of an old drowned pirate. (pp.69-70.)

センダンの木の高い梢の辺りでは、風が川のように速く流れ、荒れ狂ったような木の葉は、その流れに巻き込まれ、空の浜辺に打ち寄せる波のように泡立った。また、陸地が暗く深い海底にゆっくりと沈んでいくかのように思われた。シダは海藻のようにうねり、小屋は沈没したガリオン船のように不気味にぼんやりと現れた。そして、ジョエルには、流れるような、意味ありげな気品を帯びたズーが、その昔、溺死した海賊の人魚の花嫁にしか思えなかった。(傍点筆者)

[考察]

本事例は、「直喩の連鎖」の事例として、前稿および前々稿でも取りあげた。⁽⁷⁾ 比喩標識 “as though” によって導かれる直喩表現 “*as though it were submerged in dark deep water*” 以外にも、強意的直喩 (“swift as a river”、“mysterious as a sunken galleon hulk”)、隠喩 (“frenzied leaves”)、比喩標識 “like” によって導かれる2つの直喩表現 (“like surf on the sky's shore” と “like sea-floor plants”)を含む興味深い一節である。

「この一節はジョエルがズーとその祖父ジーザス・フィーバーの屋外での祈祷の儀式に立ち会う場面からの抜粋である。祈祷の最中、夏の嵐を思わせる暗雲を伴う疾風が吹きはじめ、センダンの木の梢を激しく揺さぶる。もちろん、ジョエルは地上から頭上のざわめく枝葉を見上げているのであるが、梢を揺ら

す疾風が『川』になぞらえられたことに端を発し、続々とイメージの拡張が促されていく。『風にざわめく梢の葉』は、見上げるジョエルの目に『空の河岸に打ち寄せる波』の泡立ちに感じられる。この錯覚は、同時に、ジョエルが立っている地面（陸地）が『まるで暗く深い海底に沈んでいくかのような』新たな錯覚を誘発し、地面から生え出る シダ = 海藻、小屋 = 沈没したガリオン船、ズー = 溺死した海賊の人魚の花嫁 という一連のイメージを引き起こす。⁽⁸⁾

このようなイメージの連鎖が詩的雰囲気生成に関わっていることは明らかであろう。

事例 (4)

From the first he'd [Joel had] noticed in the house complex sounds, sounds on the edge of silence, settling sighs of stone and board, *as though the old rooms inhaled-exhaled constant wind*, and he'd heard Randolph say: "We're sinking, you know, sank four inches last year." (p.117.)

最初から、ジョエルはこの屋敷に複雑な物音がするのに気づいていた。静けさと紙一重の物音である。石と板の静かな溜息とでも言おうか。古い部屋部屋が絶えず息を吸い込み、吐き出しているような音である。そう言えば、かつてランドルフがこう言っていた。「この屋敷は沈んでいるんだよ。去年は4インチ沈んだ」と。(傍点筆者)

[考察]

擬人法 (Personification) は、その名のとおり、「人間でないものを人間になぞらえて表現する修辞法」⁽⁹⁾である。「詩作がもつ、単純で慣習的な観念から複雑で新しい観念を創造する力は擬人化においてとりわけ顕著にみられる」⁽¹⁰⁾というレイコフの認識に基づけば、擬人表現は散文に詩的雰囲気を醸し出すレトリックであると考えられることができる。

さて本事例では、「この屋敷 (“ the house ”) スカリーズ・ランディングが擬人化されている。この屋敷の複雑な物音が、「静かな溜息」や「古い部屋部屋が絶えず息を吸い込み、吐き出しているような音」になぞらえられていることから、それは明らかだが、この擬人化によって、同時に、この屋敷が只ならぬ空間であることが暗示されている。そもそも、「スカリーズ・ランディング(髑髏の屋敷)」という名称からして不気味である。この名称が「死者の屋敷」を意味していること、さらには、「死者の屋敷」に息吹が感じられるということから、読者は自ずとこの屋敷を死と関連づけて捉えるばかりではなく、この屋敷を支配しているのは死者なのではないかと疑りはじめる。この屋敷の当主ランドルフさえ、足の踏み場もないほど、ありとあらゆる品々で溢れかえった自分の部屋を「華やかな墓場 (“ a rather gaudy grave” p.138.) と呼び、「死は命よりも強い (“ ...; death is stronger than life, ...” p.148.) とさえ語っている。この屋敷では、死者は過去の実在ではなく、現在を支配する生きた存在である。

このように、本事例は擬人法により物 屋敷 をひと(髑髏 = 死者)になぞらえ、かつ、“ as though ” 以下の比喩表現により物 屋敷)に生命(息吹)を帯びさせることで、スカリーズ・ランディングが死者の支配する不気味な異次元空間であることを読者に伝えている。

なお、本事例が s 音の頭韻を踏んでいる点も、本事例を詩的に響かせている要因の一つであろう。

From the first he'd [Joel had] noticed in the house complex sounds, sounds on the edge of silence, settling sighs of stone and board, ...

事例 (5)

It [A little red ball] struck his [Joel's] knee, and all that happened happened quickly: a brief blur of light flashed as a door banged in the hall above, and then he felt something hit him, go past, go bumping down the steps, and it was suddenly *as though all his*

bones had unjoined, as though all the vital parts of him had unraveled like the springs of a sprung watch. (p.119.)

それはジョエルの膝に当たった。すべてが一瞬の出来事だった。上の階のホールでドアがバタンという音を立てたとき、一瞬、微かな明かりがさした。それからジョエルは、何か自分が当たり、通り過ぎ、コンコンと階段を下りていくのを感じた。まるで、突然、体中の骨が外れ、体じゅうの急所が壊れた時計のバネのようにほどけてしまったような感じを覚えた。(傍点筆者)

[考察]

ジョエルはスカリーズ・ランディングに到着して以降、何日も父と会わせてもらえない。ある晩、夕食を終え、一人で台所にいたジョエルの膝に赤い小さなボールが当たる。本事例はその場面からの引用(第6章)であるが、赤いボールが転がってきたことは以前にもあった。ランドルフ、エイミー、ジョエルの三人で夕食後に語っていたときのことであった(第4章)。

But a queer sound interrupted: a noise like the solitary thump of an oversized rain-drop, it drum-drummed down the stairsteps. Randolph stirred uneasily. "Amy," he said, and coughed significantly. [...] The thumping stopped, an instant of quiet, then an ordinary red tennis ball rolled silently through the archway.

.....
Joel was still puzzling over the tennis ball. He concluded, finally, that it would be best just to pretend as though it were the most commonplace thing in the world to have a tennis ball come rolling into your room out of nowhere. (pp.87-89.)

ところが、奇妙な物音が会話をさえぎった。ひどく大きな雨雫が一つコトンと落ちたような音で、コトンコトンと階段を落ちてくる。ランドルフは居心地

わるげに身動きした。「エイミー」と彼は言って、意味ありげに咳払いをした。(中略)コツンという音は止み、一瞬静かになったかと思うと、ごく普通の赤いテニスボールが音もなく廊下を転がってきた。(中略)

ジョエルはまだテニスボールのことを考えていた。結局、彼は、テニスボールがどこからともなく室内に転がり込んでくるのは、ごくありきたりのことのようなふりをするのが一番だと判断した。

ジョエルは、テニスボールが上の階から転がり落ちてくるという不可解な出来事とそれに対するランドルフとエイミーの意味ありげな言動を、そのときは不可解なままに放っておいた。だが、本事例の場面で同じ不可解な出来事を今度は一人で体験し、ジョエルは度肝を抜かれたのであった。この場面の直後に、ジョエルはそのテニスボールが、寝たきりで口もきけない父サンソム氏が家人の注意をひきつけるための合図として自室から階下へ転がすものであることを知る。

ところで、私たち日本人は、思わぬ事態に直面し驚きを禁じえないときに、体の部位にからめてさまざまな表現をする。「腰が抜ける」腰を抜かす」足がすくむ」目玉が飛び出る」目を白黒させる」目を疑う」胆をつぶす」心臓が止まる」などなど、実に豊かな「身体表現」を有する。また、英語には、日本語の場合ほど、「身体表現」は豊富ではないということを物語る調査報告も存在する。¹¹⁾ 事実、「腰が抜ける」以下の「身体表現」を同じ意味で英語でもって表現する場合、「腰 (waist / hip)」足 (foot / leg)」目 (eye / eyeball)」胆 (liver)」心臓 (heart)」を用いる事例は思いつかないし、身体の一部を表す語句を用いて喜怒哀楽を表す英語のフレーズは日本語の場合ほどには多くはないようである。実際に、上記の「身体表現」は、“be paralyzed(/ petrified)with terror(/ fright)”との言い回しで、十分に意味は伝わる。

日英語におけるこうした身体表現の比較に基づいて本事例の比喩表現をあらためて眺め直してみると、本事例 「まるで、突然、体中の骨が外れ、体中の

急所が壊れた時計のバネのようにほどけてしまったような感じ」は、日本語における「腰が抜ける」ほどしっくりとしてはいないものの、「腰が抜ける」という日本語のニュアンスをほぼ等しく言い当てた絶妙な表現(喩え)であり、その表現の独創性とイメージ喚起力は本事例の詩的效果を高める要因であると考えることができる。

事例 (6)

And then, holding the sword to his [Jesus Fever's] chest: 'Mister Skully gimme this my wedding day; me and my woman, us just jumped over a broom, and Mister Skully, he say, 'All right now, Jesus, you is married.' Travellin Preacher come tell me and my woman that ain't proper, say the Lawd ain't gonna put up with it: sure enough, the cat done killed Toby, and my woman grieves herself so she hangs on a tree, big cozy lady got the branch bent double: back when I was just so high my daddy cut his switches of-fen that tree...' remembering, it was *as if his mind were island in time, the past surrounding sea.* (pp.159-160.)

すると、ジーザス・フィーバーはその剣を胸に当てた。「スカリー様がこの剣をわしの結婚式の日にくださったのじゃ。わしとかみさんが箒を飛び越えたのじゃ。スカリー様はこうおっしゃった。『さあ、ジーザス、お前は結婚したんだ』と。ところが、巡回牧師さんがやってきて、わしとかみさんに、それはいかん、とおっしゃるのじゃ。神様はそんなこと許してくれんと。そのとおりじゃったわい。あの猫のやつがトービーを殺しちまいやがった。それでかみさんは悲嘆に暮れて木からぶら下がっちまいやがった。太ったかみさんだったもんで、枝がうーんと曲がっちまっただ。わしが生意気だったころ、父ちゃんがその木の枝でムチを作って・・・」思い出を辿るジーザス・フィーバーの心は、時間のなかの島のようにあり、過去はその島を取り囲む海のようにだった。(傍点筆者)

[考察]

本事例は12章からなる *Other Voices* のなかで2番目に短い第9章からの引用である。わずか7頁足らずのこの章では、死の1週間前のジーザス・フィーバーが幻影を見たり、うわごとを言ったり、過去の出来事を断片的に思い出したりしている様子とあわせて、ジーザス・フィーバーが死んでしまえば、ジョエルの唯一の心の拠り所である孫のズーガスカリーズ・ランディングを去ってしまうのではないかという彼の不安な胸の内が描かれている。

本事例は、過去の出来事を断片的に思い出して独り言のように語っているジーザス・フィーバーの様子を“as if”の比喩表現で言い表しているのだが、作者はジーザスの思い出話が断片的であること、いい加減な結婚の仕方に神の怒りをかい、罰があたって猫が赤ん坊のトービーを殺し、妻がショックで首吊り自殺をしたという思い出(出来事)から、妻が首吊り自殺をした木は、昔ジーザスが少年だったころ、父親がその枝でムチを作って・・・という思い出話(出来事)に移り変わっているから、1つ1つの思い出を辿るその時どきのジーザスの心を「時間のなかの島」となぞらえている。

「時間」と「島」。異質の取り合わせである。「時間」は過去から現在を経て未来へと一方向に流れ、とどまることをしらない。一方、「島」は、時の流れとは無関係に、常にそこにとどまり続ける。「思い出」も「島」の如くである。ジーザス・フィーバーの思い出の1コマ1コマは、時間の原理ではなく、印象深さ(の強度)を原理として、彼の脳裏に深く刻み込まれている。したがって、時の流れというパラダイムで「思い出」や思い出を辿る「心」を捉える場合、それらはまさしく「島」のイメージにぴったりと符合する。また、「思い出(を辿る心)」を「島」になぞらえたことにより、「過去」を、島を取り囲む「海」になぞらえるというイメージの連鎖が成立している点も卓抜である。

事例(7)

He [Joel] was gone now, and running toward the mailbox, Idabel, outside. The road was

like a river to float upon, and it was *as if a roman-candle, ignited by the sudden breath of freedom, had zoomed him away in a wake of star-sparks*. “Run!” he cried, reaching Idabel, for to stop before the Landing stood forever out of sight was an idea unendurable, and she was racing before him, her hair pulling back in windy stiffness: as the road humped into a hill it was *as though she mounted the sky on a moon-leaning ladder*; beyond the hill they came to a standstill, panting, tossing their heads. (p.186.)

ジョエルはもうそこにはいなかった。彼は郵便箱のほうへ向かって走っていた。外にいるアイダベルのほうへ向かって走っていた。道は漂い流れる川のようにだった。突然、自由の息吹によって点火されたローマ花火が、ジョエルを星の火花の通り跡へ投げ上げたようだった。「走ろう！」アイダベルに追いつくとジョエルは叫んだ。というのも、ランディングが永久に視界から消え去ってしまわないうちに立ち止まったりするのは、考えるだけでも耐えられなかったからだ。アイダベルはジョエルの前を駆けていた。彼女の髪の毛は風を受けて後ろへなびいていた。道が丘にほうへせり上がりはじめると、彼女はまるで月に掛けた梯子づたいに、空へ登って行くように見えた。丘を越えると、二人は立ち止まり、息を切らし、頭を揺らした。(傍点筆者)

[考察]

本事例は、第11章からの引用である。前の章(第10章)で、ジョエルは家を出たアイダベルに誘われて、目的地が定まらないまま、旅に出ることに同意した。まずは、二人でリトル・サンシャインの住むクラウド・ホテルへ向かう。以前、ジョエルがリトル・サンシャインに作ってくれるよう頼んでいたお守りを受け取るためである。途中の小川に架かった板を渡っていたとき、二人はとぐろを巻いた毒蛇と遭遇する。この出来事に出鼻をくじかれた二人は、一旦、旅の続行を中断する。第11章は、自分の誕生日をかまってくれずにすねているエイミーとランドルフのやり取りの場面から始まる。ジョエルには屋敷の外

からアイダベルの合図が聞こえてくる。ジョエルはランドルフに命じられて彼の部屋にワインを取りに行かされたタイミングで姿をくらまし、アイダベルとともに全速力でスカリーズ・ランディングから遠ざかっていく。本事例はその場面からの引用である。引用文冒頭の「そこ」とは、ジョエルが戻ってくるのを待ち受けて、ランドルフが視線を向けている廊下を指す。

さて、引用文前半部分の考察である。ジョエルがアイダベルとの旅に同意したのは、父が理想とはおよそかけ離れた寝たきり状態の人物だという現実から目を背けるためであった。とぐろを巻いた毒蛇に遭遇したとき、ジョエルには毒蛇の目が父サンソム氏の目そっくりに見えた。「それに、サンソム氏はぼくをなぜそんなにきつい目で見るとだろ。 (p.180.) ぶろん、これは良心の呵責が引き起こした錯覚である。第11章で、再びスカリーズ・ランディングから逃亡を試みる直前、ジョエルは父の寝室に入り、「さようなら、お父さん」(p.185.)と、今度は面と向かって父に別れを告げる。こう宣言することで、ジョエルはこれまで自らを束縛していた良心の呵責から一気に解放される。「突然の自由の息吹 (“the sudden breath of freedom”)とは、突如ジョエルの胸にこみ上げてきたこの解放感を意味する。作者はさらに「突然、自由の息吹によって点火されたローマ花火¹²⁾が、ジョエルを星の火花の通り跡へ投げ上げたようだった」と描写することによって、これまでの心的重圧から解き放たれて身軽になったジョエルの安堵感を美しく詩的に表現している。

つぎに引用文の後半部分である。ジョエルとアイダベルが駆けていた道は、丘の方へとせり上がりはじめる。アイダベルのあとを追うように走っているジョエルの目に、月明かりを受けたアイダベルの背中が「まるで月に掛けた梯子づたいに、空へ登って行くように見えた。」この比喩表現に引用文前半部分で試みたような解釈や考察は無用であろう。おそらく読者の多くは、この描写から絵本の挿絵を見ているかの如く、その情景を思い描くことができるのではないだろうか。比喩表現のなかには、理屈を超えて「感覚的にわかる」部類のものがあるが、そうしたイメージの喚起力も、詩的特質の一つである。本事例

もこの部類である。なお、本事例は、厳密な意味の頭韻ではないにせよ、h、m、lの子音が比較的近い位置に配置されており、それによって心地良い響きとテンポの良さが醸し出されている。その点もまた、本事例の詩的一面である。

...: as the road humped into a hill it was as though she mounted the sky on a moon-
leaning ladder;

事例 (8)

..., for he [Joel] did not want to see the mule: a sharp intake of breath was Randolph's only comment, and never once did he refer to the accident, nor ask a question: it was *as if from the outset they'd planned to return to the Landing on foot*. The morning was like a slate clean for any future, and it was *as though an end had come, as if all that had been before had turned into a bird, and flown there to the island tree*: ... (p.226.)

・・・というのも、ジョエルはラバを見たくなかったのだ。ハッと息をのむのが、ランドルフの示した唯一の反応だった。その後ジョエルは、その出来事に触れることも質問することもなかった。ランディングに徒歩で戻ることがあらかじめ計画されていたかのようにだった。朝は真新しい未来が待ち受ける石板のようで、終わりはすでに到来していたかのようにでもあり、それまで存在していたものがすべて一羽の鳥と化し、小島に生える一本の木へと飛び去ってしまったかのようにだった。(傍点筆者)

[考察]

アイダベルとの二度目の旅にも失敗したジョエルは、ある日の早朝、ランドルフに急かされるように起床し、二人でクラウド・ホテルへ向かう。実母の死後、ジョエルの面倒をみてくれていた叔母のエレンがスカリーズ・ランディングを訪問する日のことである。ランドルフはエレンがジョエルを連れ帰ること

を恐れ、ジョエルには何も告げぬまま、二人で姿をくらまそうと考えたのであった。真夜中、クラウド・ホテルの上の階で何かを引きずる物音がする。リトル・サンシャインとジョエルが見に行くと、ロビーを見おろすバルコニーに、スカリーズ・ランディングからジョエルらを乗せてきたラバのジョン・ブラウンがじっと立っている。「するとジョン・ブラウンはあとずさりし、鼻息を荒げ、床を踏み鳴らした。と、まるで恐怖で気が狂いでもしたかのように駆け出し、突進してバルコニーの手摺りを壊してしまった。(p. 225.)首に巻いた手綱が梁に引っかかってしまい、ジョン・ブラウンは首つり状態で死んでしまう。本事例は、翌朝、ジョエルとランドルフがその現場を通り過ぎ、徒歩で帰路に着く場面からの引用であるが、ラバの不気味な事故死とは対照的に、ジョエルの気持ちはつぎのように晴れやかである。

...: a crazy elation caught hold of Joel, he ran, he zigzagged, he sang, he was in love, he caught a little tree-toad because he loved it and because he loved it he set it free, watched it bounce, bound like the immense leaping of his heart; he hugged himself, alive and glad, and socked the air, butted like a goat, hid behind a bush, jumped out: Boo! "Look Randolph," he said, folding a turban of moss about his head, "look, who am I?" (p.226.)

・・・気違いじみた得意な気持ちがジョエルを捕えた。彼は駆け出し、ジグザグに走り回り、歌い、愛した、愛したがゆえに小さなアマガエルを捕え、愛したがゆえにそのアマガエルを放してやった。自分の心臓の大きな鼓動のように飛び跳ねるそのアマガエルを見た。生き生きとしたうれしい気持ちで彼はわが身を抱きしめた。空気に激しいパンチを浴びせ、ヤギのように頭を突き出し、草むらに隠れ、跳び出した。パー。「ほら、ランドルフ」彼は苔のターバンを頭に巻きつけながら言った。「ほら、ぼく、だぁーれだ？」

さて、本事例には“as if”の比喩表現が2箇所、“as though”に導かれる比喩表現が1箇所含まれている。このうち詩的な趣きを帯びているのは最後の比喩表現 “...*as if all that had been before had turned into a bird, and flown there to the island tree: ...*” のみである。上掲の引用文は、この事例の直後に続く描写である。ジョエルはクラウド・ホテルでの一夜を境目として自身の過去と決別し、まるで生まれ変わったかのように、未来志向へと転ずる。「真新しい未来が待ち受ける石板のような朝」(“The morning was like a slate clean for any future, ...”)とは、ジョエルのそうした生まれ変わりを示唆する比喩表現である。また、「それまで存在していたものすべて (“all that had been before”)とは、彼を苦しめ続けてきた過去の一切合切を意味する。その過去の一切合切が、「一羽の鳥と化し、小島に生える一本の木へと飛び去ってしまったかのよう (“... had turned into a bird, and flown there to the island tree: ...”)と喩えたところに、作者の独創性と詩的趣向が発揮されていると言えるであろう。

結び

本稿では *Other Voices* をテキストとして、比喩標識 “as if(/ as though)” を用いた116の比喩表現に注目した。筆者はまず “as if(/ as though)” に続く表現形式が6とおりに分類できるということを、事例を挙げながら指摘した(第I節)。つぎに “as if(/ as though)” 表現の被喩辞が、登場人物の言動や所作など、何らかの心理的背景に基づくものであるか、情景描写など、語り手(作者)の感性(独創性)を反映するものであるかという違いによって、116事例が概ね2つに分類できること、また、詩的效果が期待できるのは後者であるとの仮説を示した(第II節)。そして最後に、語り手(作者)の感性(独創性)を反映していると判断できる51事例のなかから8事例に的を絞り、その個別について詩的效果の検証を行なった。以上の考察をとおして、比喩標識 “as if(/ as though)” を用いた比喩表現もまた他の比喩標識を用いた比喩表現と同様に、*Other Voices*

の詩的雰囲気醸し出す一要因であることを明らかにすることができた。

注

- (1) 大園弘「カポーティ小説の詩的特質⁽¹⁾ 韻律効果の考察」『教養研究』九州国際大学教養学会 第22巻第1号(2015年7月), pp.1-45、「カポーティ小説の詩的特質⁽²⁾ “(-)ike”を用いた直喩表現の考察」『紀要』九州国際大学社会文化研究所第76号(2015年9月), pp.1-25、「カポーティ小説の詩的特質⁽³⁾ 強意的直喩の考察」『教養研究』九州国際大学教養学会 第22巻第3号(2015年12月) pp.1-37 参照。
- (2) “as if”に節(S V)が続く事例について英米圏の英語教科書と日本のそれを比較し、前者が89.4%であるのに対し、後者は93.8%であるとの調査報告がある。石川慎一郎「アジア圏の英語教科書に見る直喩表現の使用 コーパスに基づく計量的分析」『中部地区英語教育学会紀要』中部地区英語教育学会40号、2011. p.186 参照。
- (3) Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Random House, 1948. p.5. 以下、テキストはこの版を用いる。引用の際には、引用文のあとに括弧を付し、ページ数のみ記す。なお、引用文中の文字の修飾(ゴシック、イタリック、下線)は、すべて筆者による。
- (4) 事例(a)では、自分の氏名を音節ごとに区切りながらゆっくりと明瞭に発音するジョエルの様子が、聴覚障害者に語りかけている人物の様子になぞらえられている。自分の名前を正確に伝えることで、聞き手(Radclif)から何らかの有用な情報が得られるのではないかというジョエルの期待感と、単身で目的地に向かう途中の彼の不安で切実な気持ちが巧みに表現されている。
- (5) ちなみに、事例(i)の“It”が指す内容は以下の引用文全体である。

Ellen and her family were good to him [Joel], still he resented them, and often felt compelled to do hateful things, such as tease the older cousin, a dumb-looking girl named Louise, because she was a little deaf: he'd cup his ear and cry "Aye? Aye?" and couldn't stop till she broke into tears. He would not joke or join in the rousing after-supper games his uncle inaugurated nightly, and he took odd pleasure in bringing to attention a slip of grammar on anyone's part, but why this was true puzzled him as much as the Kendalls. (p.10)

「エレンと彼女の家族はジョエルに優しく接してくれた。にもかかわらず、彼は彼らを恨んでいたし、たとえば、少し耳が遠いという理由で、間の抜けた見

かけのルイズという名の従姉をからかうなど、ひどい仕打ちをしてしまいたい気持ちになることがよくあった。彼は手を耳にあて、『え？ え？』と大きな声を上げ、彼女が泣き出すまでやめることができなかった。ジョークは言わなかったし、毎晩、叔父が夕食後に始めるにぎやかなゲームにも加わりとうしなかった。また、誰であろうとも文法の間違ひがあれば、それを指摘することに奇妙な喜びを感じていた。だが、なぜそうになってしまうのか、ケンダル家の人々だけでなく彼にもわからなかった。(まるで当時の数か月を、ひびの入った緑色のレンズのメガネをかけて過ごしていたかのようにだった……。)

- (6) 佐藤は言葉のあや(レトリック)によって独創的かつ新鮮なイメージを紡ぎ出す書き手の営みを「発見の認識の造形」と表現した。佐藤信夫『レトリック感覚』東京：講談社学術文庫，1992年参照。
- (7) 大園弘「カポージェ小説の詩的特質(2) “(-like)”を用いた直喩表現の考察」pp.19-20、「カポージェ小説の詩的特質(3) 強意的直喩の考察」pp.16-18. 参照。
- (8) 大園弘「カポージェ小説の詩的特質(3) 強意的直喩の考察」p.17.
- (9) 松村明編『大辞林』東京：三省堂書店、1988年，p.587.
- (10) Lakoff, G., & Turner, M.『詩と認知』(大堀俊夫訳)東京：紀伊國屋書店，1994年。(原書名：More Than Cool Reason-A Field Guide to Poetic Metaphor, Chicago: The University of Chicago,1989) p.84.
- (11) 日本語の身体表現とそれに対応する英訳を比較した南の研究によると、日本語の身体表現のほうが身体の部位を表す語句をより多く含むようである。南満幸「日英比較表現論(5)」『紀要』(11)稚内北星学園大学(2011年3月)pp.37-56 参照。
- (12) ローマ花火(roman-candle)とは「円筒の中に火薬を詰めたもので、吹き出る火花の中から次々と火の玉が飛び出る」という仕掛けの花火のことをいう。小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』東京：小学館，1973年，p.2246 参照。

参考文献

- ・石川慎一郎「アジア圏の英語教科書に見る直喩表現の使用 コーパスに基づく計量的分析」『中部地区英語教育学会紀要』中部地区英語教育学会40号、2011.
- ・大園弘「カポージェ小説の詩的特質(1) 韻律効果の考察」『教養研究』九州国際大学教養学会 第22巻第1号(2015年7月)
- ・「カポージェ小説の詩的特質(2) “(-like)”を用いた直喩表現の考察」『紀

要』九州国際大学社会文化研究所第76号(2015年9月)

- ・ 「カポーティ小説の詩的特質⁽³⁾ 強意的直喩の考察」『教養研究』九州国際大学教養学会 第22巻第2号(2015年12月)
- ・ 佐藤信夫 『レトリック感覚』東京：講談社学術文庫，1992年．
- ・ 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会編 『小学館ランダムハウス英和大辞典』東京：小学館，1973年．
- ・ 南満幸 「日英比較表現論⁽⁵⁾」『紀要』⁽¹¹⁾ 稚内北星学園大学(2011年3月)
- ・ 松村明編 『大辞林』東京：三省堂書店、1988年．
- ・ Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Random House 1948.
- ・ Lakoff, G., & Turner, M. 『詩と認知』(大堀俊夫訳)東京：紀伊國屋書店，1994年．
(原書名：*More Than Cool Reason-A Field Guide to Poetic Metaphor*, Chicago：The University of Chicago ,1989)

Poetic Characteristics in Capote's Prose (4)

Usage and Effect of “as if (/ as though)” Expression

Hiroshi Ozono

The aim of this study is to make it clear that the usage of “as if (/ as though)” expression in *Other Voices*, *Other Rooms* is also one of the important factors that heighten the poetic atmosphere in Capote's prose. Section one of this paper tries to classify 116 cases using this phrasal conjunction into six types, on the basis of their expressional patterns. Section two suggests that, based upon another point of view, these 116 cases can also be categorized into two types; the one that describes characters' speech, conduct, or carriage, which is more or less the explanation of their psychological background by the author - Capote, and the other that mainly depicts individual scene, which is supposed to reflect the author's - Capote's - sensibility, and, therefore, expected to produce a poetic atmosphere. Section three focuses on eight cases of the latter type, and examines what poetic characteristics each case carries. This paper concludes that “as if (/ as though)” expression also provides this novella with poetic atmosphere.

Key words: Truman Capote, *Other Voices*, *Other Rooms*, as if, as though, poetic atmosphere